

ロールシャッハ法による児童期における自我機能の発達過程の分析

出 井 淑 子

I 問 題

ここ数年来、子どもに対する関心・子どもに対する期待は比較にならぬほど高くかつ広いものになってきた。しかしその関心や期待の多くは知的・合理的なものの見方や態度をよしとする時代精神の影響を受けて、子どもの知的教育に傾き、その背後にある情緒的要因を軽視する風潮を生んできたことは否めない。しかし皮肉にも、こうした風潮が強くなればなるほど、かえって情緒的な問題は増大してきていることに注目したい。教育が自己の能力を立派に使用し、自分の可能力を利用してその環境に融合していく子どもの育成を目指していると考えれば、知的教育の背後にあってそれを規定している子どもの人格適応の問題こそ、まず取上げられなければならないと考える。従来児童期における人格適応の問題に対し自我心理学の立場から総合的な接近を試みたのは、Freud, A.^{1) ①} と Nagera H.²⁾ であるが、本研究はこれらのすぐれた業績をふまえて、彼らの見解を自我の体制と機能という観点から把えなおし、更におしすすめ、実証的研究にまで持ちこむことを意図している。

さて自我は、個体がそれによって過去の経験を貯え体制化しつつ、内外の要求に応え、その間の均衡を保つべく現在の行動を決定する個体内の構造的体系である。このように自我は自己の内界と外界を認知し（現実吟味 reality testing）、外傷状況を招来すると思われる時にはそれをさけることによって自らの体系を守り（自我防衛 ego defense）、内界と外界の均衡を保ちつつ、現実に適応していく働き（adaptation）をもっている。そして更に自己の体系の中に取込んだものを体制化（organization）することによって、自らに恒常性と統合性をもたらすものである。従って自我の機能をわれわれはまず適応と体制化としてとらえることができるし、又 Klopfer³⁾ の

1) Freud, A. *The Ego and the Mechanisms of Defense*. New York: International Universities Press, 1946.

2) Freud, A. Indications for child analysis. *Psychoanal. Stud. Child*, 1945, 1, 127-149.

3) Freud, A. Psychoanalysis and education. *Psychoanal. Stud. Child*, 1954, 9, 9-15.

4) Freud, A. Assessment of childhood disturbances. *Psychoanal. Stud. Child*, 1962, 17, 149-158.

5) Freud, A. The concept of developmental lines. *Psychoanal. Stud. Child*, 1963, 18, 245-265.

6) Freud, A. *Normality and Pathology in Childhood: Assessments of Development*. New York: International Universities Press, 1965.

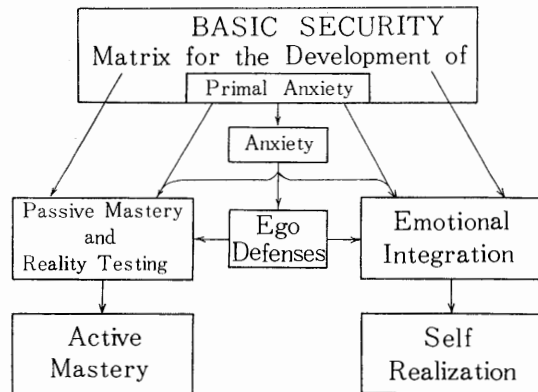
7) Nagera, H. *Early Childhood Disturbances, the Infantile Neurosis, and Adulthood Disturbances: Problems of a Developmental Psychoanalytic Psychology*. *Psychoanal. Stud. Child Monograph*. No. 2. 1966.

8) Klopfer, B. Rorschach hypothesis and ego psychology. in *Developments in the Rorschach Technique*. Vol. 1. New York: Harcourt, Brace & World Inc., 1954.

ように建設的な自我機能と自我防衛のための自我機能としてとらえることも可能である。

さてこうした自我の機能を動かしている力が心的エネルギー *psychic energy* であるが、この心的エネルギーが最も効率よく用いられる状態にあるのが、われわれ人間にとって最も望ましい状態であろう。この点でいわゆる自我の強さ *ego-strength* が問題となってくるが、次に自我機能の発達過程について論じながらこの問題を検討してみる。

Klopfer, B.⁹⁾ は第1図のような自我機能の発達図式を設定したが、彼によれば、まず自我が健全な発達をとげるためには基本的安全感 *basic security* がいかに必要であるかは母性剥奪 *maternal deprivation* の研究によって明かにされてきたところである。けれどもこの基本的安全感が存在するとしても、全ての新生児は自己の内外の刺激を受け一次不安を経験する。この一次不安を解消する道として受動的支配性や情緒の統合性への道が開かれるが、もしこの一次不安が限界をこえたり、あるいは基本的安全感が不十分な時には、自我の発達は歪みを受け、したがって自我防衛のために多くの心的エネルギーをさかねばなくなる。ここで現実吟味の線と情緒の統合性の線が別の



第1図 Klopfer による自我機能の発達図式

列に示されているのは、これら両者は互に関連はしているが、能動的支配性の発達が必ずしも高い情緒の統合性を必要としないという事実によっている。情緒の統合性とは、最初未分化状態にあったものが、分化され平衡を保っていることを指しており、この過程の中に分化と統合の状態が繰返されるが、この統合が破られて *de-integrated* 再び高い段階の統合 *re-integrated* へと進むときには基本的安全感に支えられることになる。もし基本的安全感が不足している時には、この統合性を破る危険と不安に耐えかねて多くの心的エネルギーは自我防衛に費やされ、自己実現の道が阻止されることになる。けれども基本的安全感が適当に存在し、高い情緒の統合性のある時は、自我はむしろその自我防衛を適当にゆるめて、自己の内部の原始性に対処できるようになる。そしてこの過程を Klopfer は自己実現の過程とよんだ。

こうした自我機能の発達の図式は、子どもの発達につれてどのような様相で展開していくであろうか。この過程を従来の精神分析的発達心理学の研究知見をもとにまとめてみると、

I：誕生～9—12か月（受動的支配性の時期）この段階で自我は一次不安におびやかされる。けれども対象表象の発達と判断能力の出現によって予期の機能が出現し、これによって子どもは一次不安をさけることができるようになる。自我はいまやその状況の犠牲になることなく、かえ

9) Klopfer, B. Rorschach hypothesis and ego psychology. in *Developments in the Rorschach Technique*. Vol. 1. p. 569.

ってその状況を支配することができるようになる。

Ⅱ：9—12か月～3—4歳（能動的支配性の発達する時期） この時点での運動装置の成熟による歩行の開始と言語の発生はきわめて重要である。前者によっては環境への依存性がうすれ、次の段階への発展が促進されるのに対し、後者は対象やその表象に言語的な記号を付与することを可能にし、対象やその表象の間の差異やそれぞれの詳細の弁別を容易にするが、これらは換言すれば現実吟味を鋭敏にし、支配性を強化するといえる。けれどもこの時期の支配性はまだ完全に子どものものとはなっていない。たとえば括約筋を支配する神経の発達に伴ない、子どもは次第に排泄物の保持あるいは排出を統制することができるようになるが、この統制は実は親から来ていることが多く、真の自律には至っていない。この矛盾が、対象との両極的な関係の仕方として発現するとも考えられる。この段階から次の段階への過渡期（ほぼ3歳頃）には、所謂反抗期とよばれる激しい自己主張がみられるが、これはプリミティブな形で自己実現とも云うべきものと考えられ、いろいろな経験を通じて、この段階での自我の体制が強められ、安定したものになるに従い、新しい変化を求める内的衝動が高まり、これが外的・表面的には反抗という形で具現されるとみることができる。

Ⅲ：3—4～6—7歳（現実吟味の発達する時期） 以前自他の区別がつかない時期に、単に不快として体験していたものを、自他の区別が成立するにつれて、自分の欲求や外界からの願望の制限を要求や禁止として体験するようになる。そしてこれに抗しようとする不安が生じ、その不安をさけ対象を保存するために子どもは要求されるがままに動こうとする。こうして幼児はある程度まで両親の要求と罰をさえも内化 *internalize* するに至る。こうして自我は超自我を内在化し、環境から独立して自律的に行為を決定することができるようになる。従ってこの時期にはこうした大きな仕事を果さねばならず、情緒の統合性はいまだ得られないが、現実吟味は鋭敏になり、めざましい発達をとげる。

Ⅳ：6—7～9—10歳（情緒の統合性と自己実現への動きの高まる時期） この時期にはそれまでに作り上げられた自我の体制が再体制化され、内的平衡が確立される。Bornstein, B.¹⁰ はこの時期を5～8:6歳と8～10歳の二期に区分したが、5～8:6歳では自我の大部分はまだ自己の内的衝動や超自我との葛藤から脱しきれず、両親に対しても服従と反抗との両極的な態度を示すのに対し、8～10歳になると情緒の統合性が高まり、自我は現実のうちかつことができるようになる。こうして児童期の自我の体制は一応のまとまりと安定を得、これを基礎にして自己実現への動きが高まり、次の思春期へと発達することが可能になると考えられる。

以上みてきた発達段階は単独に現われるのではなく、互に重複して現われるものである。つまり各個人の自我の体制は、それぞれの発達段階で固着点を残し、退行し、やり直し、再適応しつつ徐々に前進していくものである。したがって最適範囲内の不安は次の発展への推進力になる。

¹⁰ Bornstein, B. On latency. *Psychoanal. Stud. Child*, 1951, 6, 279-285.

さてこうした子どもの特殊性を考えると、児童期において精神的に健康な状態とはどのような状態と考えるのが妥当であろうか。大人の場合には optimal ideal な状態が健康な状態と考えられている¹¹⁾¹²⁾のに対し、児童期では個人が発達の途上にあり optimal ideal な状態の規定はきわめて困難であるが一応次のように考えることができるであろう。すなわち、発達途上にある個人の自我の体制が豊かな基本的安全感に支えられ、最適範囲内の一次不安や不安を契機にして発達を続けている状態を云い、ここではそれぞれの自我機能はその子どもの発達段階に合った状態で、次の発展を予想した一時的なものであることが前提とされる。そしてこれからはずれる状態を発達のみだれと考えることができるが、健康であるか発達のみだれと考えるかは実際にはそれほど明確には決めがたい。具体的には、各段階での何らかの群規準との比較または各個人の長期にわたる追跡的研究にまたねばならない。しかもその際外的に観察しうる症状や表現形態ではなく、その底にあってその症状を規定している個人の自我の体制に注目することが大切である。

そしてこのためにも自我機能からみた子どもの規準設定的 normative な研究が要請される。

さてこれまでのロールシャッハ法による児童研究は、サインアプローチによる年齢別の群規準設定のための研究が主流をなし¹³⁾¹⁴⁾、子どもの反応に特徴的な反応の単位のあいまいさや固執反応の分析から、子どもの心性の特殊性に迫ろうとしたものがわずかに認められるにすぎない¹⁵⁾¹⁶⁾。こうした流れの中において子どもの自我機能の発達過程をロールシャッハ法で明らかにしようとした研究は全く認められない。

ところでロールシャッハ法が自我の体制を反映し、さらには潜在的な自我の体制をも反映するとは云っても個人の自我を通してなされるものであるから、反応が得られるためには自我の体制がある程度の水準にまで発達していなければならぬ。したがって対象となる子どもが幼なければ幼いだけ、発達をアプリアリに設定した指標のある種類のもののみの構造的変化としてだけでは考えられない面があり、ロールシャッハ法では扱えられないに至らない面がむしろ重要になるとも考えられる。ここに発達研究の方法上の困難が存するが、自我の体制とその機能からみた子どもの行動の質的・機能的分類¹⁷⁾にまだあいまいさの多い現状では、ロールシャッハ法によって検討してみるのもまずとられるべき一つの方角であろう。本研究は(1)こうした自我の体制のあり方の

- 11) Hartmann, H. Psychoanalysis and the concept of health. in *Essays on Ego Psychology: Selected Problems in Psychoanalytic Theory*. New York: International Universities Press, 1964.
- 12) Offer, D and Sabshin, M. *Normality*. New York: Basic Books Inc., 1966.
- 13) Ames, L.B. et al. *Child Rorschach Responses: Developmental trends from two to ten years*. Paul B. Hoeber Inc., 1952.
- 14) 辻悟・浜中薫香 児童の反応 ロールシャッハ・テスト I (心理診断双書 I) 中山書店, 1958
- 15) 井上和子 児童のロールシャッハ反応—反応単位のあいまいさについて. ロールシャッハ研究, 1961, 4, 10—27.
- 16) 板谷美代子 幼児に施行したロールシャッハ・テスト—固執反応について. ロールシャッハ研究, 1963, 6, 68—84.
- 17) Bolland, J., Sandler, J. et al. *The Hampstead Psychoanalytic Index: A Study of the Psychoanalytic Case Material of a Two-Year-Old Child*. Psychoanal. Stud. Child Monograph. No. 1. 1965.

年齢および発達段階による変容の様相をロールシャッハ反応から検討し、(2)自我機能の発達の年齢および発達段階別の規準をえ、現象学的接近法¹⁸⁾を児童期の子どもについて進めていくための資料をうることを目的としている。

II 方 法

被検者：4～9歳児各男女10名ずつおよび10歳児男5名、女4名、11歳児男4名女4名、計137名。これらはいずれも京都市内在住の幼稚園児から小学校6年生までの児童である。抽出に際しては担任者の評定により行動障害のないこと、知的能力にかんしては正常範囲にあること（IQ 100～130）の条件を満たす者からランダムに選んだ。

手続：ロールシャッハ法の施行にあたっては、Klopfer の方式に従った。ただし4・5歳児については質問段階はカード毎に行なった。

ロールシャッハ指標の決定：Klopfer の RPRS¹⁹⁾を参考にしつつ、それに更に量的分析の際重視されている指標を加え以下の39項目を設定した。これらの指標について各被検者ごとにその頻度を算出し、年齢別に7群を比較した。

(I) 現実吟味にかんする指標 5項目（①平均形態水準評点、②最低形態水準評点が負数の時、それと最高形態水準評点との差、③形態水準評点が1.0以上の反応の全反応に対する比率、④形態水準評点が0.0～0.5の反応の全反応に対する比率、⑤形態水準評点が負数の反応の全反応に対する比率）

(II) 情緒の統合性にかんする指標 19項目

a- 基本的安全感にかんするもの 8項目（①RPRSの濃淡反応にかんする項目のうち、評点1にあたるもの：暖かさ、柔かさ、透視として使用されたFc, FK, ②評点 $\frac{1}{2}$ にあたるもの：冷たさ、堅さとして使用されたFc, ③評点0にあたるもの：K, KF, ④評点 $-\frac{1}{2}$ にあたるもの：色彩として使用されたFcおよびFk, kF, k, cF, ⑤評点-1にあたるもの：Fc-, FK-, 不健全な状態にある内臓として使用されたFc, およびc, ⑥FK+Fc: F比率, ⑦分化した濃淡記号と未分化な濃淡記号との比率, ⑧無彩色と色彩反応の比率）

b- 環境に対する情緒的反応性に関する指標 6項目（①RPRSの色彩反応に関する項目のうち評点1にあたるもの：FC, ②評点 $\frac{1}{2}$ にあたるもの：爆発的あるいは受動的なものとして用いられたCF, Cdes, 昂揚的に用いられたCsym, ③評点0にあたるもの：F↔C, F/CおよびC/F, ④評点 $-\frac{1}{2}$ にあたるもの：抑うつ的に用いられたCsym, 何らの感情も伴わずに与えられた爆発的なCF, 不健全な状態にある内臓として用いられた色彩, ⑤評点-1にあたるもの：FC-, C

18) 河合隼雄 現象学的接近法について—ロールシャッハ法における方法論の問題。ロールシャッハ研究, 1962, 5, 150—161.

19) Klopfer, B. Rorschach Prognostic Rating Scale. in *Development in the Rorschach Technique*. Vol. 1. New York: Harcourt Brace & World Inc., 1954.

および Cn, 色彩錯合, ⑥ Sum C ⑦カード VIII, IX, X に対する反応率)

c- 情緒の統制に関する項目 3項目 (① FC: CF+C 比率, ② F%, ③ FK+F+Fc%)

d- 自我防衛に関する項目 2項目 (RPRS では自我防衛は濃淡および色彩反応の障害から把握されるとされるが, 自我形成の途上にある児童期にあっては色彩や濃淡の使用の否定あるいは回避, 感受性の欠如を本来の形でとらえ, 自我防衛と考えることはきわめて困難であり, 自我防衛はむしろ色彩や濃淡カードにおける反応の内容や形態水準, 反応数から間接的に推察されるにとどまると考えられる。これは自我防衛を低年齢層でとらえる方法が別に考えられなければならないことを示しているが, この点については本研究では省略し, 別の機会にまつことにし, ここでは①濃淡および色彩に対する反応としてとりあげられない不快感を示す感想, ②カードの好悪の選択に際し理由として述べられた濃淡および色彩に対する不快感を示す言及を取りあげるにとどめる。)

(Ⅲ) 自己実現にかんする指標 13項目

a-①M数, ②運動量, 自由さ, 現実との距離からみたM反応に対する準備性, ③FM 数, ④FM 反応に対する準備性, ⑤m 数, ⑥m 反応の性質

b-内的統制にかんする項目 7項目 (① M: FM 比率, ② M: FM+m 比率, ③ F% ④ FK+F+Fc%, ⑤ M—数, ⑥ FM—数, ⑦ m—数)

(Ⅳ) 全反応に関する指標 2項目 (①全反応数, ②反応拒否カード数)

これらの指標のうち, 百分率を算出するものを除き, 付加反応を主反応に加えて計算してある。

Ⅲ 結果とその考察

上記の各指標について各被検者ごとにその値を算出し, 各群における平均値とその出現率を示したのが第1～14表である。

第1～4表中太字で示した数値は, 各指標をそれぞれ独立の変数とみなし, 各群内で20例に7例以上の割合であらわれる指標をモーダルな指標として, そのモーダルな指標に限って太字で示した。20例に6例以下の割合でしか出現しない指標は, 群内での個人差のあらわれであって, 群全体としての代表性はうすいと考えられる。このように各群の特徴を知るために, 各指標の平均

第1表 現実吟味にかんする指標の年齢別平均値および出現率

C. A. 指標	4 歳		5 歳		6 歳		7 歳		8 歳		9 歳		10—11歳	
	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率
(I) ① $\Sigma F.L./N$	.36	100	.81	100	.85	100	1.04	100	1.52	100	1.01	100	1.14	100
現F. ② ずれ	2.60	89	2.23	75	2.85	90	1.38	45	2.83	85	1.60	55	1.84	59
実吟L. ③ DX %	60.10	100	72.50	100	72.50	100	80.50	100	79.35	100	76.85	100	81.18	100
④ XD %	14.60	68	14.40	85	11.50	95	14.30	80	12.45	95	16.85	90	12.47	88
⑤ DX-%	25.30	79	12.00	75	15.90	90	5.65	50	8.20	85	6.30	55	6.35	59

京都大学教育学部紀要 XIV

第2表 情緒の統合性にかんする指標の年齢別平均値および出現率

C. A.		4 歳		5 歳		6 歳		7 歳		8 歳		9 歳		10—11歳	
指標		平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率
(II) a - shading	① 1	.05	5	.50	30	.50	35	.90	55	1.60	70	.70	40	2.82	76
	② ½	.16	16	.25	20	.15	15	.20	15	.30	15			.18	18
	③ 0							.35	25	.65	35	.25	20	.18	18
	④ -½	.05	5	.30	30	.40	30	.65	30	.65	40	.70	40	.82	47
	⑤ -1			.20	20			.05	5	.05	5	.10	10	.06	6
b - colour	① 1	.26	16	.30	20	.90	60	1.50	75	.85	50	.95	55	.47	41
	② ½	.63	26	.20	20	1.35	70	1.20	70	1.50	65	1.05	65	.88	65
	③ 0	.05	5	.15	15	.20	20	.30	25	.30	20	.10	10	.24	24
	④ -½	.26	26	.20	20	.10	10	.35	20	1.10	45	.50	35	1.00	65
	⑤ -1	.75	42	.30	30	.15	15	.10	10	.50	25	.20	15	.30	18
⑥ ΣC		1.70	63	.80	65	1.81	95	2.13	90	3.14	95	1.84	90	1.98	100
⑦ VIII+IX+X%		306.0	89	38.90	100	36.65	100	32.90	100	36.40	100	34.95	100	34.23	100
c - ② F%		76.40	100	75.20	100	69.40	100	48.45	100	57.10	100	63.95	100	51.80	100
③ FK+F+Fc%		76.40	100	75.20	100	69.65	100	51.45	100	58.35	100	65.25	100	56.35	100
d - ① Fc remarks		.26	26	.15	15	.10	10	.30	30	.20	20	.30	30	.18	18
② FC remarks		.05	5	.15	15	.10	10	.10	10	.15	15	.05	5		

第3表 自己実現にかんする指標の年齢別平均値および出現率

C. A.		4 歳		5 歳		6 歳		7 歳		8 歳		9 歳		10—11歳	
指標		平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率
(III) ① M数		.53	21	.80	55	1.25	55	2.80	65	2.65	80	2.05	80	2.59	82
M—数		.32	16	.15	10	.15	10			.30	10	.10	10	.18	18
② M+readiness	1	.53	15	1.10	40	2.55	50	5.05	65	6.55	75	3.80	70	4.70	76
	½			.55	30	.75	40	1.50	60	3.10	70	.90	55	1.05	59
	0	.10	5	.25	30	.50	30	1.25	55	1.45	50	1.15	65	1.48	45
③ FM数		.95	58	1.85	80	2.55	90	4.30	90	5.15	90	3.15	85	.60	94
FM—数								.15	10	.40	20			.24	18
④ FM+readiness	1	2.00	47	4.10	80	5.05	85	8.65	90	11.25	95	6.65	85	13.24	94
	½	.32	26	.70	45	.70	35	1.05	50	1.15	45	.50	30	2.30	65
	0	.21	11	.90	40	1.30	75	2.75	80	2.00	80	2.30	70	2.77	82
⑤ m数		.37	26	.75	40	.60	40	2.90	80	2.40	75	1.55	60	3.00	94
m—数				.05	5			.10	5	.25	20			.12	12
⑥ m反応の性質	1	.16	16	.25	15	.35	25	.95	50	1.45	65	.55	30	1.59	88
	½	.11	11	.30	20	.15	15	1.35	55	.70	40	.85	45	1.23	65
	0	.11	5	.10	5	.10	10	.50	35	.05	5	.15	10		

第4表 全反応にかんする指標の年齢別平均値および出現率

指標	C. A.		4 歳		5 歳		6 歳		7 歳		8 歳		9 歳		10—11歳	
	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率	平均	出現率
① R数	15.90	100	19.90	100	22.60	100	25.60	100	33.95	100	24.15	100	31.12	100		
② rej数	1.10	32	.40	20	.15	10	0	0	.05	5	.15	10	0	0		

値を比較する際、群全体としての代表性を問題にするならば、平均値を単純に比較するのではなく、その出現率との関連を考慮する必要がある。すなわち、モーダルでない指標の値は、その群の特徴を反映しているとは必ずしも云いがたい。ところで発達過程をとらえるにあたっては、われわれは個々の指標の発達曲線を見ると同時に指標相互の内的な関係を問題にしなければならない。すなわち発達時相による自我の体制をいかに関連づけるかが問題となる。従ってまず、各指標ごとに7群の差を示し、いくつかの段階に区分し、次にその段階における指標相互の関係とそれが発達段階によってどう変化し関連するかについて検討することにする。第5～14表は、各指標ごとに7群の差を検定した結果を示したものである。

(I) 現実吟味に関する指標：第5表に示した通りであるが、4歳と5歳の間で形態水準1.0以上の反応は飛躍的に増大するが、まだ全体としての平均形態水準評点には有意な上昇がみとめられるにはいたらない。

7歳になると形態の良・不良のずれが最も小さく、しかも、ずれの出現率も低下し、平均形態水準評点がそれ以前に比べ上昇する傾向が認められはじめる。8歳では良・不良のずれが2.85と再び大きくなりずれの出現率も高まるが、平均形態水準評点が有意に上昇している点からみて、

第5表 現実吟味にかんする指標の群差の検定結果：検定はすべて X^2 による

(*5% **1% ***0.5%)

	平均形態水準	0以下	0～1.0	1.0以上	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
① $\Sigma F.L./N$	4歳	3人	14人	2人							
	5歳	1	15	4							
	6歳	0	14	6							
	7歳	0	10	10	*						
	8歳	0	7	13	**	*	*				
	9歳	0	9	11	*						
	10—11歳	0	5	12	**	*	*				
② ず れ	ず れ	0	0.1～3.0	3.0以上							
	4歳	3	7	9							
	5歳	5	12	3							
	6歳	2	9	9							
	7歳	11	5	4	*		**				
	8歳	3	7	10				*			
	9歳	9	7	4			*	*			
	10—11歳	7	7	3			*	*			

京都大学教育学部紀要 XIV

	%	81~100	60~80	60以下	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
③ DX+%	4歳	4人	3人	12人							
	5歳	6	10	4	**						
	6歳	4	14	2	**						
	7歳	8	12	0	**						
	8歳	13	6	1	**		*				
	9歳	8	11	1	**						
	10—11歳	9	7	1	**						
	%	31以上	11~30	0~10							
④ XD%	4歳	3	6	10							
	5歳	1	9	10							
	6歳	0	10	10							
	7歳	1	13	6							
	8歳	1	9	10							
	9歳	0	15	5	*						
	10—11歳	2	6	9						*	
	%	31以上	11~30	0~10							
⑤ DX-%	4歳	8	5	6							
	5歳	1	9	10	*						
	6歳	3	10	7							
	7歳	0	6	14	**		*				
	8歳	0	7	13	**						
	9歳	0	4	16	**		*				
	10—11歳	0	5	12	**		*				

ずれは大きくとも反応の質が著しく上昇しているとみることができよう。9歳ではずれが小さくなり平均形態水準も7歳とほぼ同じになるが、以後徐々に反応の質も上昇し、その全反応に占る割合も大きくなるとされる。従って、4歳と5歳の間、7歳と8歳の間にその前後と異なった傾向を認めることができる。すなわち5歳以前では負数の形態水準を示す反応の比率が高く、質の高い反応も認めにくい。5～7歳になると1.0以上の反応が急激に増大し、平均形態水準評点も徐々に上昇の傾向を示し、良・不良のずれも小さくなって一応の安定を得るとされる。8歳になると、再び良・不良のずれが大きくなるが、平均形態水準評点が有意に上昇している点全体としては反応の質が著しく上昇しているとみることができ、以後この傾向が一たんは弱まりつつも続くと考えられる。

(II) 情緒の統合性に関する指標

a—基本的安全感に関するもの8項目について7群の差をみたのが第6～7表である。濃淡反応のうち評点1にあたる暖かさ、柔かさ、透視として用いられたFc及びFK反応は、8歳にいたりそれ以前に比べ有意に増大し、9歳でいったん減少の傾向をみせるが10歳以後では再び4～7歳に比べ有意な差が認められる。6歳以後になって夫々の群にモデルな指標となったFc及びFKは8歳で平均1.60、10歳で平均2.82を示すに至る。評点 $\frac{1}{2}$ にあたるものは7群の間に有意

な差は認められない。評点0にあたるものは、8歳で4～6歳に比べ有意に多く出現し、モーダルな指標となる。そして以後この傾向は弱まりつつも存続する。評点 $-\frac{1}{2}$ 、-1のものは、7群ともにその出現率は少なく群間に有意な差は認められない。FK+Fc: F 比率は7, 8, 10歳を除き、FK+Fc=0の者が過半数を占める。7, 8歳頃からFK+Fc>0となる者が増えるが9歳で一たん減少し、さらに10歳で7歳を除く、他の5群に比べ有意に増大する。けれども依然とし

第6表 基本的安全感にかんする指標についての群差検定結果

	実数	0	1	2	3以上	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
①Fc:1	4歳	18人	1人	0人	0人							
	5歳	14	4	1	1							
	6歳	13	4	3	0							
	7歳	9	5	5	1	**						
	8歳	5	5	4	6	**	*	*				
	9歳	12	3	4	1							
	10—11歳	2	3	5	7	**	**	*	*		*	

	実数	0	1以上
②Fc: $\frac{1}{2}$	4歳	16人	3人
	5歳	16	4
	6歳	18	2
	7歳	17	3
	8歳	17	3
	9歳	20	0
	10—11歳	14	3

有意差なし

	実数	0	1	2以上	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
③Fc:0	4歳	19人	0人	0人							
	5歳	20	0	0							
	6歳	20	0	0							
	7歳	15	4	1							
	8歳	13	3	4	*	*	*				
	9歳	16	3	1							
	10—11歳	14	3	0							

	実数	0	1	2以上
④Fc:- $\frac{1}{2}$	4歳	18人	1人	0人
	5歳	14	6	0
	6歳	14	5	1
	7歳	14	2	4
	8歳	12	4	4
	9歳	12	4	4
	10—11歳	9	3	5

有意差なし

	実 数	0	1
⑤Fc:-1	4歳	19人	0人
	5歳	16	4
	6歳	20	0
	7歳	19	1
	8歳	19	1
	9歳	18	2
	10—11歳	16	1

有意差なし

		FK+Fc=0	FK+Fc< $\frac{1}{4}$ F	FK+Fc> $\frac{1}{4}$ F	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
⑥FK+Fc:F	4歳	15人	4人	0人							
	5歳	11	9	0							
	6歳	11	9	0							
	7歳	8	8	4	*						
	8歳	5	15	0	**			**			
	9歳	12	8	0					*		
	10—11歳	2	10	5	**	**	**		*	**	

		分化> 未分化	分化< 未分化	分化÷ 未分化	分化= 未分化=0	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
⑦分化: 未分化	4歳	0人	0人	5人	14人							
	5歳	1	4	8	7							
	6歳	3	2	7	8							
	7歳	6	3	6	5	**						
	8歳	7	4	6	3	**						
	9歳	4	4	4	8	*						
	10—11歳	11	1	4	1	**	**	**	*	*	*	

		無≥2有	$\frac{1}{2}$ <有無 <2有	無=有	無=½有	無<½有	無=有 =0	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
⑧無彩色: 有彩色	4歳	3人	2人	1人	1人	6人	6人							
	5歳	4	2	4	3	5	2							
	6歳	3	1	1	2	12	1							
	7歳	3	7	4	1	4	1							
	8歳	1	3	3	2	10	1							
	9歳	6	2	1	1	10	0							
	10—11歳	4	4	6	0	3	0	*						

て、 $FK+Fc<\frac{1}{4}F$ にとどまり、最適範囲と云われる $\frac{1}{4}F<FK+Fc<\frac{3}{4}F$ に入る者は7, 10歳にわずかに認められるにすぎない。

分化した濃淡記号と未分化な濃淡記号との比率は10歳になって他の6群との間に有意差がみとめられ、その64%が分化>未分化を示すと考えることができる。分化<未分化の出現率はどの群においても20%以下であるが、これは、評点1の濃淡反応が4歳を除く各群内で最も高い頻度で

出現していることからもある程度予想することができる結果である。

無彩色と色彩反応の比率は7群の間に有意な傾向は認められなかった。

以上、基本的安全感に関する指標についてまとめると、評点1の濃淡反応は8歳になってそれ以前と比べ有意に増大し（平均1.60）、9歳でいったん減少の傾向をみせるが（平均.70）、10歳では再び4～7歳に比べ有意な差が認められる（平均2.82）。8歳では同時に評点0にあたるものが、4～6歳に比べ有意に多く出現し、モータルな指標となるに至る。このように、8歳という時期は基本的安全感に対する欲求を自我が自らの中に統合し、統制のました仕方に対処することができるようになり始める時期と考えられるが、同時に焦点の定まらぬ、漠然とした不安が、モータルに認められる点、基本的安全感への欲求を自我の体制の中に統合していく過程での1つの転換期と云えるのではないと思われる。8歳以前では、評点1にあたるものが6歳以後に単にモータルに認められるに止まり、きわめて低い出現率で、Fc、cF が混り合って出現するにすぎない。これは基本的安全感に対する欲求が母親という対象に向って外的に表現されている時には濃淡に対する反応として出にくいこと、濃淡を濃淡として知覚できるにはある一定年齢水準に達していることが要求されることを示していると考えることができる。8歳で漠然とした、焦点の定まらぬ不安を体験したあと、この不安は10歳になって、モータルな FK 反応となって、より洗練された形で出現する。

こうした不安の指標は、次の発展を促進する機能をもっていると考えことができ、積極的意義をもっていると思われる。

したがって基本的安全感については、8歳とそれ以前、および9歳と10—11歳との間に異った傾向を認めることができた。

b—環境に対する情緒的反応性に関する指標について7群の差をみたのが第7表である。

これについての結果をまとめると、

4～5歳では指標①～④ともに少く、しかも5～26%にみられるにすぎないのに対し、評点—1にあたる指標⑤は4歳にモータルな指標として認められる（平均.75）。このことは、この年齢層では、環境からの情緒的刺激に対する反応性がきわめて低く、反応しても、統制を欠いた、自分本位のものになり易いことを示している。6歳になるとFC反応はモータルな指標となり、引き続

第7表 環境に対する情緒的反応性にかんする指標についての群差検定結果

	実 数	0	1	2	3以上	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～11歳
⑤Color: 1	4歳	16人	2人	0人	1人							
	5歳	16	3	0	1							
	6歳	8	8	3	1	*	*					
	7歳	5	9	3	3	**	**					
	8歳	10	8	0	2							
	9歳	9	7	2	2							
	10—11歳	10	6	1	0							

京都大学教育学部紀要 XIV

	実 数	0	1	2	3以上	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10—11 歳
②Color: $\frac{1}{2}$	4歳	14人	3人	1人	1人							
	5歳	16	4	0	0							
	6歳	6	5	8	1	*	**					
	7歳	6	7	5	2	*	**					
	8歳	7	7	3	3		*					
	9歳	7	8	3	2		*					
	10—11	6	8	2	1		*					

	実 数	0	1	2以上	
③Color: 0	4歳	18人	1人	0人	有意差なし
	5歳	17	3	0	
	6歳	16	3	1	
	7歳	15	4	1	
	8歳	16	2	2	
	9歳	18	2	0	
	10—11歳	13	4	0	

	実 数	0	1	2以上	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10—11 歳
④Color: $-\frac{1}{2}$	4歳	14人	5人	0人							
	5歳	16	4	0							
	6歳	18	2	0							
	7歳	16	2	2							
	8歳	11	4	5			*				
	9歳	13	6	1							
	10—11歳	6	6	5	**	**	**	*			

	実 数	0	1	2以上	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10—11 歳
⑤Color: -1	4歳	11人	4人	4人							
	5歳	14	6	0							
	6歳	17	3	0							
	7歳	19	0	1	*	*					
	8歳	13	3	4							
	9歳	17	2	1							
	10—11歳	14	1	2							

		0	1	2	3	4以上	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10—11 歳
⑥ ΣC	4歳	8人	4人	1	2人	4人							
	5歳	8	7	4	1	0							
	6歳	1	6	8	3	2	*	*					
	7歳	2	5	4	4	5		*					
	8歳	1	4	2	5	8	*	*					
	9歳	2	9	3	3	3		*					
	10—11歳	0	6	3	5	3	*	*					

出井：ロールシャッハ法による児童期における自我機能の発達過程の分析

	%	～20	21～30	31～40	41～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
⑦VIII+IX +X%	4歳	4人	3人	7人	5人							
	5歳	0	4	8	8							
	6歳	0	6	6	8							
	7歳	0	10	7	3	*						
	8歳	0	4	10	6							
	9歳	1	5	10	4							
	10—11歳	0	5	9	3							

き7歳では4～5歳に比べ有意に多くみられる。CF 反応も、6歳になると5歳に比べ多くなり、しかも平均値はFC 反応よりも高い。 ΣC も急激に増大する。このように6歳ではそれ以前に比べると、環境からの刺激に対する反応性が飛躍的に増大するが、 $F \leftrightarrow C$ 、 F/C 、 C/F などの表面的な仕方や $FC-$ 、 $CF-$ など現実吟味の障害を思わせる仕方の反応が、わずかずつながら認められる点、CF 反応の平均値がFC 反応のそれを上まわる点などから、反応性の増大が不適切なあるいは成功しない統制の努力を伴って生じることを示していると考えられる。7歳では6歳に引きつづき評点1および $\frac{1}{2}$ の反応が4～5歳に比べ有意に多く、評点-1の反応が7群中最も少なくなる。6歳で認められた不適切な統制や成功しない統制への努力を示す反応は依然として認められるが同時にFC 反応の平均値が7群中最も高い(1.50)点、環境からの刺激に対し、時に統制のとれた仕方でも反応することができるようになってきていると考えられる。ところが、8歳以後は、評点 $-\frac{1}{2}$ の反応がモーダルな反応となってみられ、再び評点 $-\frac{1}{2}$ の反応の平均値がFC 反応の平均値を上まわるに至る。けれども7群ともに情緒刺激に対する反応性の最適範囲($\Sigma C > 3$)には達していない。

従って、環境に対する情緒的反応性に関して5歳と6歳の間、7歳と8歳以後の間にそれぞれ異った傾向を認めることができた。

c—情緒の統制に関する3項目の指標について7群の間の差をみたのが第8表である。

FC: $CF+C$ 比率は4歳と10歳の間を除いて、7群に有意な差がみられない。F %では $50 < F\% < 80$ の出現率はほぼ変らないが7歳を境にして、 $F\% > 80$ が減り、 $F\% < 50$ が増大する。この傾向は7歳以後ずっと続き10歳になると $F\% > 80$ は認められない。FK+F+Fc%もF%と同

第8表 情緒の統制にかんする指標についての群差検定結果

	実数	$FC > CF + C$	$FC < CF + C$	$FC \div CF + C$	$FC = CF + C = 0$	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
FC: $CF+C$	4歳	3人	8人	0人	8人							
	5歳	5	7	3	5							
	6歳	5	5	9	1							
	7歳	5	7	6	2							
	8歳	5	11	3	1							
	9歳	4	9	5	2							
	10—11歳	1	9	7	0	**						

	%	～50	50～80	80～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～11歳
F %	4歳	1人	6人	12人							
	5歳	2	9	9							
	6歳	2	12	6							
	7歳	11	6	3	*	*	**				
	8歳	6	12	2	*	**					
	9歳	5	11	4	*	**					
	10—11歳	8	9	0	*	*	*		**	**	

	%	～50	50～80	80～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～11歳
FK+F+Fc%	4歳	2人	5人	12人							
	5歳	2	10	8							
	6歳	2	12	6							
	7歳	10	7	3	*	*	*				
	8歳	6	11	3	*						
	9歳	5	11	4	*						
	10—11歳	7	10	0	*	*	*				

様の傾向を示す。

FC: CF+C は7群間に有意な差は認められないが全体としては $FC < CF + C$, $FC \div CF + C$, $FC > CF + C$, $FC = CF + C = 0$ の順に出現する。前の2つをこみにして, $FC \leq CF + C$ でみるとこの年齢層では各群ともその過半数が含まれ, 先にみたごとく, 情緒的反応性が最適範囲より少ない上に, 統制されるに至っていないと考えられる。

F%, FK+F+Fc%ともに7歳を境にして有意な減少を認めるが, 7歳以前にF%が高いのは, 他の機能がまだ分化しておらず, Fが現実場面に処する最初のやり方であることによると思われる。7歳以後のF%の減少は色彩反応, 運動反応の増大に対応している。

以上この年齢層では, 情緒はまだ統制されるに至っておらず, 高いF%, FK+F+Fc%はむしろ他の機能が分化していないことを示していると考えるべきであろう。

d—自我防衛に関する項目については方法のところで述べたように本研究では2項目をあげるにとどめたが, 第9表に示すごとく, 色彩より濃淡に対する不快感を示す感想の頻度が高いのが注目される。

(Ⅲ) 自己実現に関する指標: 各指標について7群の間の差を検討したのが第10～12表である。

まずM反応についてまとめると, 4歳では21%の出現率で, 平均.53しか認められなかったのが, 5歳でモデルな指標となり(平均.80), 8歳になると4～5歳に比べ, 有意に増大する。

第9表 自我防衛にかんする指標の年齢別出現人数

	指 標	Fc remarks	FC remarks
自我防衛にかんする項目	4歳	5人	1人
	5歳	3	3
	6歳	2	2
	7歳	6	2
	8歳	4	3
	9歳	6	1
	10—11歳	3	0

出井：ロールシャッハ法による児童期における自我機能の発達過程の分析

第10表 自己実現にかんする指標についての群差検定結果（Ⅰ）M反応について

	実 数	0	1	2	3	4～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
M 数	4歳	15人	2人	0人	1人	1人							
	5歳	9	6	5	0	0	*						
	6歳	7	7	3	0	3	*						
	7歳	7	3	2	0	8	*						
	8歳	4	3	4	2	7	**	*					
	9歳	4	6	4	2	4	**	*					
	10—11歳	3	1	6	3	4	**	**	*				

	実 数	0	1	2	3	4	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
M:1	4歳	16人	0人	1人	1	1人							
	5歳	11	2	4	2	1							
	6歳	9	1	3	3	4							
	7歳	8	3	1	2	6							
	8歳	5	1	3	3	8	*						
	9歳	6	3	0	2	9	*	*					
	10—11歳	3	1	2	2	9	**	**					

	実 数	0	1	2	3	4～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
M:½	4歳	19人	0人	0人	0人	0人							
	5歳	14	2	3	1	0							
	6歳	12	4	2	2	0	*						
	7歳	8	5	3	2	2	**						
	8歳	6	3	5	3	3	**						
	9歳	9	7	1	3	0	**						
	10—11歳	7	5	3	1	1	**						

	実 数	0	1	2	3	4～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
M:0	4歳	17人	2人	0人	0人	0人							
	5歳	13	5	0	2	0							
	6歳	14	3	2	1	0							
	7歳	9	2	3	0	6	*	*	*				
	8歳	10	3	2	2	3							
	9歳	7	6	5	1	1	*						
	10—11歳	8	3	4	0	2							

第11表 自己実現にかんする指標についての群差検定結果（Ⅱ）FM 反応について

	実 数	0	1～2	3～4	5～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
FM 数	4歳	7人	11人	1人	0人							
	5歳	4	11	3	2							
	6歳	3	6	10	1	**						
	7歳	2	6	4	8	**						
	8歳	1	5	4	10	**	*					
	9歳	3	7	6	4	**						
	10—11歳	1	2	4	10	**	*					

京都大学教育学部紀要 XIV

	実 数	0	1~5	6~10	11~	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
FM:1	4歳	10人	8人	1人	0人							
	5歳	4	11	3	2							
	6歳	3	9	5	3	**						
	7歳	2	9	3	6	**						
	8歳	1	6	5	8	**						
	9歳	3	9	5	3	**						
	10—11歳	1	3	2	11	**	*	*			*	

	実 数	0	1	2	3~	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
FM:½	4歳	15人	2人	2人	0人							
	5歳	10	5	3	2							
	6歳	13	3	2	2							
	7歳	10	5	2	3							
	8歳	10	5	2	3							
	9歳	14	3	2	1							
	10—11歳	6	6	1	4	*						

	実 数	0	1~2	3~4	5~	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
FM:0	4歳	17人	1人	1人	0人							
	5歳	12	5	3	0							
	6歳	5	12	2	1							
	7歳	4	7	5	4	**	*					
	8歳	4	12	2	2	**	**					
	9歳	5	7	5	3	**	**					
	10—11歳	4	5	4	4	**	*					

第12表 自己実現にかんする指標についての群差検定結果 (Ⅲ) m 反応について

	実 数	0	1~2	3~5	6~	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
m 数	4歳	14人	4人	1人	0人							
	5歳	12	6	2	0							
	6歳	12	7	1	0							
	7歳	4	9	4	3	**	*	*				
	8歳	5	9	3	3	**	*	*				
	9歳	8	7	5	0							
	10—11歳	1	6	8	2	**	**	**			*	

	実 数	0	1	2	3~	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
m:1	4歳	16人	3人	0人	0人							
	5歳	17	1	2	0							
	6歳	15	3	2	0							
	7歳	10	5	3	2							
	8歳	7	7	3	3	**	**					
	9歳	14	3	2	1							
	10—11歳	2	6	7	2	**	**	**			**	

出井：ロールシャッハ法による児童期における自我機能の発達過程の分析

	実 数	0	1	2～3	4～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
m: $\frac{1}{2}$	4歳	17人	2人	0人	0人							
	5歳	15	4	1	0							
	6歳	17	3	0	0							
	7歳	11	4	1	4							
	8歳	12	4	4	0							
	9歳	11	5	3	1							
	10—11歳	6	5	4	2	* *		* *				

	実 数	0	1～2	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
m: 0	4歳	18人	1人							
	5歳	18	2							
	6歳	18	2							
	7歳	13	7	*						
	8歳	19	1				*			
	9歳	17	3							
	10—11歳	17	0				* *			

評点1のM反応も丁度この時期に、4～5歳より有意に多くみとめられる。(ただし、評点1, $\frac{1}{2}$, 0のM反応の算出法はKlopper法と異なり、運動量、自由さ、文化的距離の各項目について、各人毎に頻度を算出し、夫々評点1, $\frac{1}{2}$, 0にあたる項の最大出現頻度を以て、本指標とした。) 評点 $\frac{1}{2}$ および0のM反応は、それぞれ4～5歳と6歳以後、4～6歳と7歳の間に有意な増大を認めた。次に各年齢群内での評点1, $\frac{1}{2}$, 0のM反応の生起率を比較すると、9歳になってはじめて有意差が認められ、評点1のM反応が評点 $\frac{1}{2}$, 0のM反応に比べ有意に高く認められる。このように5歳頃から徐々に増大しはじめたM反応は8歳で4～5歳に比べ有意な差が認められるようになる。評点 $\frac{1}{2}$, 評点0のM反応は夫々6, 7歳に有意に高く出現するが、以後この傾向は、有意な増大が認められず、後者の場合は減少する。

したがって5～7歳頃に認められるM反応増大の傾向は主に、評点 $\frac{1}{2}$ および0の反応の増大に負うところがで、自己の内部にある原始的な力に対し、自我は積極的に対処するに至っていない、それをまだ距離のあるdistantなものとして認知するにとどまっている。これに対し、8歳にはじまるM反応の増大は評点1の反応の増大に支えられている点、自我の体制はここで、一段と強化、拡張され、自己の問題として自己の内部にある原始的な力が取上げられ、対処の仕方が考えられるに至る。

次にFM反応についてまとめると、FM反応はすでに4歳時からモデルな指標として確立されており6歳以後になると、さらにそれ以前にくらべ、有意に増大する。評点1のFM反応もこの時期に増大する。評点 $\frac{1}{2}$ のFM反応は他の2つに比べ、少なく、7歳以後は評点1のFM反応に、評点0のFM反応が更に有意に増大し加わる。このようにFM反応はすでに4歳から

モデルな指標となっているが、6～7歳以後の FM 反応の増大が8歳以前は、評点 $\frac{1}{2}$ および0の M 反応に対応しているのに対し、8歳以後は評点1の M 反応の増大に対応している点、8歳以前ではより無意識で未成熟な衝動は、自我に受容され統合されることなく、直接に外的行動として行なわれると考えられるのに対し、8歳以後になると評点1の M 反応の増大に支えられ、次第に自我の体制の中に統合されはじめると思われるが、この点については、次の内的統制について論じる際、再び取上げることとする。

m 反応は7歳以後モデルな指標となり、それ以前に比べ有意に増大する。7歳での m 反応の増大は評点1および0の m 反応に支えられているのに対し、8歳以後では主として評点1の m 反応に支えられているとみることができる。m 反応は自己の人格への敵対的な力や、脅威の認知を示すものと考えられるので、m 反応が認められるということは、自我の体制がそれ自体として認知するだけの強さを備えてきたと考えてよいであろう。7歳での m の増大が評点0の m 反応にも支えられていることは、過渡的段階を示すものと考えられる。内的統制に関する項目について7群を比較したのが第13表である。M—, FM—, m— 反応はそれぞれ、どの群内でも出現率は少なく、群間での有意差はみとめられない。M: FM については、4～5歳では M, FM とともに0のもの、 $M \div FM$ でしかも両方ともきわめて少いもの、および $FM > M$ が多いのに対し、6歳以後になると $FM > M$, $M > FM$ が多くみられる。しかも6歳以前の $FM > M$ は $FM > M = 0$ の形をとるのに対し、6歳以後では $M < FM < 2M$, $FM > 2M$ が多くなる。このように、6歳以前では $FM \div M \div 0$ と $FM > M = 0$ が相半ばしてみられるのに対し、6歳以後では $FM > M$ が $M > FM$ の約2倍の頻数で出現する。このことは FM 反応の際に述べたことと対応して、

第13表 内的統制にかんする指標についての群差検定結果

		FM) M	M) FM	$M \div FM$	$M = FM$ =0	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
M: FM	4歳	8人	1人	2人	8人							
	5歳	10	1	6	3							
	6歳	13	6	0	1	*	*					
	7歳	12	3	4	1							
	8歳	11	5	3	1	*						
	9歳	13	5	0	2	*	*					
	10—11歳	12	4	1	0	*	*					

		$M > FM + m$	$M < FM + m$	$M \div FM + m$	$M = FM + m = 0$	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
M: FM +m	4歳	1人	9人	2人	7人							
	5歳	1	13	3	3							
	6歳	5	13	0	2	*						
	7歳	3	15	2	0	*						
	8歳	5	12	2	1	*						
	9歳	4	15	0	1	**	*					
	10—11歳	1	16	0	0	*						

出井：ロールシャッハ法による児童期における自我機能の発達過程の分析

	実数	0	1	2～		実数	0	1	2～		実数	0	1～
M-数 有意差なし	4歳	16人	2人	1人	FM-数 有意差なし	4歳	17人	2人	0人	m-数 有意差なし	4歳	19人	0人
	5歳	18	1	1		5歳	19	0	1		5歳	19	1
	6歳	20	0	0		6歳	19	1	0		6歳	20	0
	7歳	20	0	0		7歳	17	2	1		7歳	19	1
	8歳	18	1	1		8歳	16	3	1		8歳	16	4
	9歳	18	2	0		9歳	20	0	0		9歳	20	0
	10—11歳	14	3	0		10—11歳	14	2	1		10—11歳	15	2

より未成熟で無意識的な衝動が自我によって認知され、自我の体制に統合され、統制されはじめるに至ったこと、しかもその統制は12歳以後の課題であることを示していると思われる。

M: FM+m についても6歳を契機として、同様の变化を認めることができる。すなわち $M < FM + m$ が約 $\frac{2}{3}$ の割合を占めるとはいえ、6歳以前の $M \div FM + m$ や $M = FM = 0$ に加えて、 $M > FM + m$ がみられるようになる。

(IV) 全反応に関する指標

反応数及び反応拒否数について7群を比較したのが第14表である。反応数は4歳と8歳及び10歳、5歳と10歳の間に有意差が認められた。このように反応数は次第に増加し、8歳で有意な増

第14表 全反応にかんする指標についての群差検定結果

	実数	1～10	11～20	21～30	31～40	41～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
R 数	4歳	4人	11人	3人	1	0							
	5歳	3	7	9	0	1							
	6歳	0	11	6	1	2							
	7歳	2	7	5	5	1							
	8歳	0	4	8	2	6	**	*					
	9歳	1	10	4	2	3							
	10—11歳	0	5	3	6	3	**	*					

	実数	0	1	2～	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10—11歳
反応拒否数	4歳	13人	2人	4人							
	5歳	16	2	2							
	6歳	18	1	1							
	7歳	20	0	0	*						
	8歳	19	1	0							
	9歳	18	1	1							
	10—11歳	17	0	0	*						

加をみるが、9歳でやや減少し、10歳で再び多くなる。

反応拒否はいずれの群でも少なく、0～32%にみられるにすぎない。けれども4歳ではモデルな指標となっている。

以上の結果を総括すると、(1)現実吟味にかんする指標では4歳と5歳の間、7歳と8歳の間にその前後と異った傾向を認めた。4歳では負数の形態水準を示す反応が多く、良質の反応も認めにくい、5～7歳になると現実吟味がより分化し洗練され安定する。8歳以後、濃淡、色彩反応にみられるように不安が高まるにつれ動揺は大きくなるが、全体としてはより分化し、鋭敏になると思われる。

(2)基本的安全感にかんする指標では、8歳という時期は漠然とした不安によって、基本的安全感に対する欲求の自我への統合が促進され、統制のきいた仕方でも対処することができるようになる時期と考えられる。この過程は10歳以後、より洗練されたFKによってますます促進されるに至る。

(3)環境に対する情緒的反応性にかんしては、5歳と6歳の間、7歳と8歳以後の間にそれぞれ異った傾向がみられる。4～5歳では、情緒刺激に対する反応性がきわめて低く、反応しても、統制を欠いた、自己本位のものになり易いが、6～7歳では反応性そのものが増大し、不適切なあるいは成功しない統制への努力を伴いつつ、時として統制のとれた反応もできるようになる。8歳以後は反応の自発性は増大するが、統制がくずれる。

(4)従って本研究の年齢段階では、情緒はまだ十分には統制されておらず、現実吟味の発達はずしも情緒の統合を要しないでも行なわれることを示しており、これは Klopfer, B. の仮説を支持する結果である。

(5)自己実現にかんする指標では、8歳以前では、無意識的で未成熟な衝動は自己に受容され統合されることなく、直接に外的行動に表現され、自己の内部にある原始的な力に対しても積極的に対処するには至らない。これに対し8歳すぎでは、自我の体制はいちだんと強化・拡張され、自己の人格に対する脅威を認知できるまでになる。そして自己の内部にある力が積極的に取上げられ、対処されはじめるが、内的統制そのものは12歳以後の課題としてのこされる。

以上、各指標について7群の差を検討し、各指標ごとに年齢によって異なった傾向の認められることを確認した。すなわち4歳と5歳、7歳と8歳、9歳と10～11歳の間になんらかの形で発達の転換期が存在すると考えることができる。ことに7歳と8歳の間には、各指標に共通して有意差が認められており、重要な意味をもっていると考えられる。

このように8歳前後で重要な転換期があるとは云え、この年齢段階では、情緒はまだ十分には統制されておらず、現実吟味との融合も十分ではない。そして本研究の結果ではこのように情緒の統合性がいまだ得られない段階でも、同時に自己実現への動きを認めることができた。自己実現の過程は、理想的には情緒の統合性およびそれと現実吟味との融合を前提としているとされるが、この結果は、情緒の統合性がえられない段階でもプリミティブな形で、自己実現への動きが生じることを示している。そしてこれは、小学校就学前と小学校3・4年生頃に自主性の確立へ

向う飛躍の時期があるとする河合²⁰⁾の指摘とも対応している。結局 Klopfer の自我機能の発達図式は、ある自我機能が完成した後に次の機能が発達してくるという風ではなく、3つの建設的な自我機能が同時に存在し、それらはそれぞれの段階に応じたあり方をしていると考えられるべきであろう。

さて8歳前後が児童期における人格発達の大きな転換期であるという本研究の結果は、市村²¹⁾、飯田²²⁾らの研究によっても支持される。彼らはそれぞれ5～12歳と小学校在学期間を通じ、同一児童に追跡的にロールシャッハ法を施行し、Bühler の BRS を用いて検討した結果、人格統合水準から云えば8～10歳頃までに急激な発達があり、それ以後は緩かな曲線をたどることを見出している。またさらに、潜在期を二期に分け、8歳前後をその転換期とした Bornstein, B の指摘ともきわめてよく一致している。

以上、児童期における自我機能の発達の様相を検討したが、その中で5～7歳は、基本的安全感への欲求の自我へ統合の動きはまだあまりみられないとは云え、環境への情緒的反応性が増大し、統制への努力が認められる点、現実吟味も徐々に発達し、形態水準の正負のずれも少なくなつて一応の安定をうと思われる点、M 反応、FM 反応にみられる内的な衝動の高まりとそのプリミティブな形での認知がみられるようになる点などから、徐々に発達してきた体制がこの段階なりに一応のまとまりと安定に達するとみることができる。そしてこれが8歳を契機にしてそのまとまりと安定が破られ次の段階でのまとまりと安定に向うと考えられる。つまり8～10歳頃は、情緒の統合性と自己実現への動きが自我の中に統合される時期で、Nagera, H. の inner economic rearrangement の時期、Bornstein, B. の潜在期の後期にあたると考えうることが明らかにされた。今後は、本研究と同一年齢段階にある臨床グループとの比較検討を通じ、児童期における精神的健康と発達のみだれとを見分けるのに有効な指標を見出していきたい。

20) 河合隼雄 ユング心理学入門。培風館、1967、p. 236

21) 市村潤 ロールシャッハ・テストによる児童発達の追跡的研究。臨床心理、1965、4、235—248。

22) 飯田美智子 ロールシャッハ・テストによる児童の性格発達の継続的研究。ロールシャッハ研究、1964、7、71—94。